編集委員会便り

2ヶ月に1回行われる編集委員会では，本誌に掲載する論説，展望・解説，技術報告などの内容や執筆依頼先を検討・協議しますが，特集については特に念入りな話し合いが行われます．

エネルギー＆資源とくれば，材料はいくらでもあるように感じられますが，話題性・ニュース性と，6～7編の項目を持つ題材は，あることはあっても，前回採り上げてからあまり時間が経過していなかったり，他の学会誌で組んでしまったり，と案外限定されるものです．

何か少し目新しい題材はないかと思っていたところ，国内外で火山の噴火が相次いだり，地震の予知が話題となったりし，一方中東では湾岸戦争が起こって大量破壊が行われ，大勢の人が被災しました．

ここで思ったのは，人間は環境を損ないかねない規模のエネルギーを手軽く扱うほどの技術を手にしましたが，自然災害のエネルギーの規模は，人工的エネルギーに比べてどのくらい桁が違うのだろうということです．

こういう話はあまり聞いたことがありません．そこで，災害の項目を考えてみますと，火山，地震，津波，台風，竜巻，雷，雪崩…と，特集に必要な6～7項目は出て来ます．

これらの項目は，被害が広範囲に及ぶものから局所的なものまでさまざまですが，各災害間の定量的な規模の差というものにも，興味を覚えます．

編集委員会に提案しましたところ，委員の皆さんも，面白そうだが執筆者が揃うだろうかということでした．それではと，その気になって関係図書を調べますと，火山の噴火であれば下鶴大輔先生など，自然災害現象のエネルギー規模を計算している人がそれぞれの分野に居るものです．

編集委員会に項目と執筆候補者の案を提出しました結果は，これなら特集が組めそうだということになりましたが，小生が関係図書等で目にした執筆候補者より適任の先生が居られることも十分考えられます．委員の吉田先生から，

「こういう題材なら，下鶴先生がすべてお分かりだから，ここは下鶴先生に全体にわたってのご助言をいただくのが良いだろう．」

というお話があり，吉田先生のご紹介で1992年の暮れも近付いたころ，東京は世田谷区の下鶴先生のご自宅を訪問しました．

初対面の門外漢だったにも拘らず，先生は大変親切に迎えて下さいました．経緯等をお話しますと，そういうことならと，執筆者を勘案した上での各項目を挙げて下さり，火山の関係は，先生自ら執筆して下さることになりました．

推薦して下さいました執筆者の連絡先については，色々な名簿をお出しになって，住所や電話番号まで調べて下さいましたので，事務局も大助かりだったことと思います．各項目をどう並べるか，その順序も気になるところでしたが，その点も内容・関連等を考慮して決めていただけました．

1時間ほどで要件が済んだ後，奥様とも少々懇談でき，大変幸福な気持ちで下鶴先生宅を後にしたことを思い出します．これで委員の皆さんにも安心してもらえると思うと，足取りも軽く帰りました．

そのような訳で，今回の特集は下鶴先生のお陰で実現できました．先生には厚く御礼申し上げます．またほぼ全員の先生が，これまで本学会とはご縁がなかったのですが，快くご執筆いただけましたこと，心から感謝申し上げます．

ところで，この原稿を書いているとき，またまた雲仙普賢岳で大規模な土石流が発生し，被害は過去最大で500棟に上ったとのニュースがありました．

自然災害のエネルギー規模の大きさをまざまざと思い知らされるとともに，人間の発生するエネルギーにまつわる自然環境の破壊を考えますと，エネルギーの有する課題の複雑さが改めて感じられます．

関　矢　英　士
(㈱東芝　火力プラント技術部主幹)